

●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 46

本遠寺伝説

伝説
そぞろ歩き

日蓮の
孫弟子日澄
寺創建
薄雲浮かびて
師匠を偲ぶ



日蓮ゆかりのお堂を移築

「本遠寺の枕返し」も有名

熱田神宮から西へ600mほど行くと、本遠寺があります。かつて熱田神宮内に法華堂というお堂があり、日蓮が鎌倉時代に東国から京へ帰る途中、ここ熱田に立ち寄り、法華堂に籠って法華経百日説誦の行を修めました。

その後、日蓮の孫弟子にあたる日澄が熱田に滞在した時、神宮内に日蓮ゆかりの法華堂があることを知り、それを譲り受けて、応安年間(1368～1375年)に、神宮西の地に「熱田法華堂本遠寺」と号して創建した寺です。山号は妙光山。日澄は、康暦2年(1380年)8月1日、120歳の高齢まで天寿を全うしました。

永禄10年(1567年)8月7日、連歌師として第一人者の里村紹巴が本遠寺に宿泊し、連歌の興行をしたことがその著『富士見道記』に記してあります。

本遠寺は室町時代に最も隆盛を極め、広大な寺領を有していました。なかでも客殿は、清洲城にあった書院を信長から譲り受けた由緒あるもので、九間梁十三間とい

う大きなものでした。また、楼門は戦前まで国宝に指定されていました。

本遠寺には昔からタヌキが住み着いているという言い伝えがあり、右枕で眠っているといつの間にか左枕に移し返されているといわれ、「本遠寺の枕返し」として有名で、住職は気味悪がって寺に寝泊まりしなくなったという話も伝わっています。

しかし、昭和20年(1945年)の大空襲で全山焼失。その後、昭和55年(1985年)に鉄筋コンクリートの威風ある本堂を再建しました。ちなみに、本遠寺は「ほんのんじ」が正式な呼び方ですが、地元では「ほんのうじ」として知られています。

今では主要道が走り、たくさんのクルマが往来していて、タヌキとは無縁で想像がつきませんが、戦前までは境内も広く、樹木がうっそうと茂っていたようで、その様子は『尾張名所図会』にも描かれています。

46th Letter



ギリシャ神話は真実か否か

虚実皮膜論こそロマンの原点

『尾張名所図会』は、江戸時代末期から明治初期にかけて刊行された地誌で、尾張の名勝、史跡、神社仏閣を絵と文章で紹介した書物で、今でいうガイドブックです。熱田神宮はもちろんのこと、本遠寺、松風の里、夜寒の里なども紹介されています。

ギリシャ神話もルーツをたどると、紀元前8世紀後半に盲目の詩人・ホメロスが作ったとされる二大叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』、そして紀元前8世紀末から7世紀初めに活躍したヘシオドスが描いたとされる二大叙事詩『神統記』と『仕事と日々』に至ることは、あつたの杜122号掲載の『SHINWA WALK 36 松風の里伝説』の中で述べましたが、これらに続くものとしては、『ホメロス賛歌』と総称される作品があります。これは紀元前8世紀末から6世紀にかけてさまざまな詩人によって作られた作品集で、全33編から構成されるそれぞれの神々を主人公にして讀えた詩です。

また、紀元前5世紀にアテネでも三大悲劇詩人である



▲日蓮の孫弟子の日澄が創建した本遠寺。

アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスが神話を題材にした悲劇作品を作り上げたほか、1世紀のローマ時代には詩人・オウィディウスが『変身物語』を著述。主に変身をモチーフに百科全書的に編集し、ギリシャ神話を語る上で重要な作品になっています。

その後、1世紀頃に博学の学者・アポロドロスがこれらのギリシャ神話を整理して、全体のあらすじを要約した概説書『ギリシャ神話』としてまとめ上げ、これが今伝えられているギリシャ神話のもとになっています。

どこまでが真実で、どこからが虚構か。それは定かではありません。しかし、江戸時代の人形浄瑠璃作家である近松門左衛門も、虚実皮膜論として「虚構と現実の微妙な境界にこそ芸術の真実がある」と説いています。

トロイヤ戦争は本当にあったのか、オデュッセウスは本当に10年間も冒険したのか、タヌキは本当に枕返しをしたのか、あれこれ思いを巡らすところこそ歴史ロマンがあるのではないのでしょうか。



※今回は、笠寺と阿野の一里塚伝説を特集します。お楽しみに。

■ 写真/Kiyoshi K ■ イラスト/Rei ■ 取材文/Icarus